

論 説

ナチスに抗して断頭台に消えた司祭
——ハインリッヒ・マイアー——

伊 藤 富 雄

目 次

はじめに

I 抵抗運動に至るまで

II 抵抗運動グループの結成

III 逮捕

IV 民族裁判所の死刑判決

V 断頭台への道

おわりに

は じ め に

オーストリアの首都ウィーン北西部、新酒のワインを飲ませる「ホイリゲ」で有名なウィーン19区のグリーンツィンクから少し南に下がったウィーン18区ヴェーリンクに「ハインリッヒ・マイアー博士通り」がある。ウィーン大学のすぐ傍にあるショッテン・トアーのバス停から市バス41Aで40分ほど乗って行くと、終点近くにその通りがある。ウィーン市内には個人の名前が付けられた通りが幾つもあるので、最初にその通りを歩いた時には、その名前の人物がいかなる人物なのか、全く気にならなかった。その後彼がカトリック教会の司祭でありながら、反ナチスの抵抗運動組織を立ち上げ、そのために逮捕され、悪評高い民族裁判所で死刑判決を受け、最後はギロチンで処刑されたことを知った。そして改めてヴェーリンクの「ハインリッヒ・マイアー博士通り」を通り、更に彼が秘密国家警察に逮捕されるまでの間、司祭として仕えていた同じヴェーリンクのビショップ・ファーバー・プラッツ7番地のゲルストホーフ・聖レオポルト教会を訪れてみた。教会そのものは特に変わった所はないが、教会の側廊にマイアーの運命を想起させる頭部のない祈りの木像が設置されている。それを見て、最初は何とも言えない恐怖感を覚えたが、マイアーの生涯を思い浮かべながら見詰めていると、不思議なことに恐怖感は消え、その代わりに何とも表現しにくい感情、感動とも呼べそうな気持ちに包まれたのだった。神に仕える司祭でありながら、一体どうして彼は過酷な最後が待ち受けている抵抗運動を行なうに至ったのだろうか。以下マイアーの死に至るまでの経緯を追っていくことにする。

I 抵抗運動に至るまで

ハインリッヒ・マイアーは1908年2月16日に低地オーストリア州のグロースヴァイカーズドルフに生まれ、27日に当地のカトリックの司祭によって洗礼を受けている。¹⁾ 父親はオーストリア国営鉄道の検査官、母親は保安警備の会社員の娘だった。両親は共に熱心なカトリック教徒だった。2年後に妹のエルフリーデが生まれているが、経済的に苦しい状況だったため、妹は小学校2年生の時に父方の叔母に引き取られ、マイアーとは別々に暮らしている。父親の転勤のため何度か引っ越しをしたため、彼はウィーンから西へ約50キロの都市ザンクト・ペルテン、さらにはウィーンから南西へ約130キロの都市レオーベンの人文系のギムナジウムに通い、レオーベンで大学入学資格を得ている。1926年10月9日、彼はウィーン9区にあった神学校に入学し、そこで2年間神学を学んでいる。彼が進学できたのは現在のスロヴァキアで食料品店を経営していた未婚のもう一人の叔母の援助のお陰だった。彼女は敬虔なカトリック教徒で、マイアーが司祭になると決心したのも、この叔母の影響によるものかも知れない。因みにこの叔母は生涯に渡って優秀な彼を経済的に援助している。²⁾ この神学校時代にマイアーは不思議なことに神学生たちの中でお互いに対立し、争っている二つの団体、保守的な「カトリック学生連盟」と左翼的な「ブント青少年連盟」に同時に加盟している。そうした団体の活動の中で彼は後に見られる辣腕の弁護士のように弁明し、主張する術を習得していったと思われる。

1928年から1930年まで、病気の友人に代わってローマのグレゴリアナ大学に留学し、スコラ哲学を学び、哲学の博士号を得ている。ローマから帰国後の1930年から1932年にかけてはウィーン・カトリック神学部で神学を学んでいる。1932年7月24日に彼は22名の助祭たちと共に当時の補佐司教カンブラートによってウィーンの聖シュテファン寺院で助任司祭に任じられる。

1932年10月1日、司祭として初めてシュタインフェルトの教会に入る。その後、1934年9月1日にはウィーンのメードリンクの教会へ移っている。その教会でマイアーは1935年3月18日、司祭兼首席司祭レクナーの死後、暫定的に空席の司祭を夏まで務めている。同年9月1日に彼はウィーン18区ヴェーリンクのゲルストホーフ・聖レオポルト教会へ招聘された。

この新しい助任司祭はヴェーリンクの教区に新鮮な活気をもたらした。27歳のマイアーはその気さくな性格で教区の子供たちの心を捕らえ、一緒にサッカーに興じたり、ミサでの従者

1) Jan Mikrut: DDR. Heinrich Maier. Kaplan in Gerstthof, Widerstandskämpfer (1908-1945), in: Jan Mikrut (Hg.) Blutzeugen des Glaubens. Martyrologium des 20. Jahrhunderts. Dom Verlag, Wien, 1999.

2) Helga Thoma: Mahner-Helfer-Patrioten. Porträt aus dem österreichischen Widerstand. Eine Dokumentaion. Wien-Klosterneuburg Edition Va Bebe 2004, S.141.

を務める子供たちとふざげ合ったりもしたという。彼は常に青少年たちの関心事に耳を傾けた。またしばしばオペラにも通い、ワーグナーの『マイスター・ジンガー』上演のことを周囲の者たちに夢中になって話したり、さらには、ある一人の若い女性歌手を気に入り、彼女は有名になると預言したという。³⁾

マイアーは助任司祭を務めながら同時にメードリンクの工業・商業連邦学校で宗教の授業を担当、その後ウィーン18区ゼンパー通りの実科ギムナジウムでも宗教の授業を担当した。

1938年3月のドイツ軍によるオーストリア進駐以降、ナチスは当初はカトリック教徒を体制に取り込むために様々な画策を行ない、またカトリック教会側もヒトラーのウィーン進駐の際にはカトリック教会は全ての教会の鐘を鳴らして歓迎の意を表するなど、ナチスに対して友好的な態度を取っていた。また当時の首相パーペンがお膳立てしたイニツァー枢機卿とヒトラーの会見では、ヒトラーは教育問題などでカトリック教会の望んだ保証を与えている。しかしながら両者の蜜月時代は長くは続かなかった。1938年10月7日、聖シュテファン寺院の夕べの祈りの枠内で約8,500名のカトリックの青少年たちがナチ体制に反対するデモを行なった。ナチスはしかしその報復としてすぐさまウィーンの大司教の邸宅を襲撃した。これを契機にナチスは公然と教会への攻撃を行なうことになる。人々に教会から脱退するよう、またカトリックの学生には宗教の授業をボイコットするように勧め、さらにはカトリックの教会の運営する宗教学校にも弾圧を加え、宗教学校を解体に追いやってしまう。26もの大規模な神学校と修道院が閉鎖され、約6千もの教会関係の団体、財団の活動が禁止され、その財産は没収された。そのためマイアーも宗教の授業を行なうことができなくなった。彼はしかしこの強制された余暇を利用し、ウィーン大学神学部に入学し、さらに神学の研究を進めている。マイアーは前年の1937年には約半年間スイスとフランスに滞在し、民主主義の国々とナチズム支配下のオーストリアとの相違を肌で感じている。

1939年6月、彼が大学へ提出した博士論文の内容は中世後期に活躍した自由思想家パドゥアを中心に、教会、国家、支配、民族という当時のアクチュアルな政治状況と似通ったテーマを取り扱ったものだった。マイアーは教会と国家の関係に触れ、教会の権利と自立性の問題を追及し、同時に共同体に於ける個人の存在意義と責任を強調している⁴⁾。

1939年9月、第二次世界大戦が勃発する。同年12月1日、彼は聖レオポルト教会に加え、ウィーン9区のゲルストホーファー通り129番地の「三位一体聖堂」教会（今日の「ヨハネス・ネーボムク礼拝堂」）の責任者にも任じられた。

戦時下のオーストリアの政治状況の緊迫、ナチズムの増大する精神的全体主義の要求、ユダ

3) Ebd., S.142.

4) Ursula Rimpler: "Maier, Heinrich"-kath. Theologe, Kaplan der Pfarre Wien-Gerstthof (1908-1945), in: Biographisch-Bibliographisches Kirchenlexikon, Bd. XXVII, Nordhausen 2007, S.886.

ヤ人への虐待, それらを目の当たりにしたマイアーはナチズム体制に対する断固とした反対者となり, 司祭という身分でありながらも, オーストリアの解放のために積極的に肩入れする使命を有する, との確信を抱き, 1940 年夏以降, 抵抗運動グループ結成のために積極的に活動を開始した。

II 抵抗運動グループの結成

マイアーを個人的に良く知っている人たちは, 彼がモダンな快活かつ社交的な人物で, 解放的で際だって人なつっこい人物だった, と報告している。⁵⁾ カリスマ的な宗教教師として彼はその明るい社交性, 博識, 弁舌さわやかさで若者たちに大きな感銘を与えたのだった。また彼はしばしば司祭の服装ではなく, 平服で出かけるなど, 他の聖職者とはかなり異なった存在だったようである。

彼の長年の同僚の補佐司教シュトライトはしばしばマイアーに政治活動に走ることの危険性を警告し, 司祭として教会内での活動に専念するように説得したという。シュトライトは後に, マイアーはキリスト教の意味での殉教者ではないとして, 以下のように述べている。

「彼は恐らく我々が信じている意味では決して殉教者でも信念に殉じた人物でもない。すなわち〈純粹に信仰のために〉迫害を受け, 殺害されたのではない。しかしながら彼は(。。。)信仰というものは単にしばしば世間に背を向けた教会の中だけに存在すれば良いのではなく, 特に世俗や世俗の暴力を貫き, 例え抵抗運動という危険を冒しても, 実現しなければならない, ということを実証したのだった。」⁶⁾

またマイアーのウィーン神学校時代の同級生であるロイドゥルによれば, マイアーは非常にリベラルで柔軟な考えに立ちながらも, 自分の世界観に敵対する者たちに対しては「戦闘的ときえ言えるラジカルさ」を有していた, と言う。⁷⁾ 彼は友人たちに, 軍事力を有する残忍なナチ体制を打倒するには自分たちも暴力と軍事力を行使することが不可欠であること, またオーストリアを占領しているドイツ軍の弱体化を図るためにサボタージュを行ない, 連合国に積極的に協力し, 民間施設ではなく, 軍事施設・軍需産業施設のみを爆撃するための情報を彼らに

5) Gerhard Jagschitz: Über Kaplan DDR. Heinrich Maier. Wien 2005, S.5. 2005 年 3 月 28 日に St.Leopold-Gersthof の教会で行なわれた講演。教会のホームページに掲載されている。

6) Norbert Rodt/Anton Hecht: Zeugnis der Aufstehung. Dokumente und Bild aus dem Leben des Priesters Heinrich Maier. Tyrolia-Verlag Innsbruck-Wien 1995, S.8.

7) Franz Loidl: Kaplan Heinrich Maier. Ein Opfer des nationalsozialistischen Gewaltsystems, in: Kirche und Staat. FS Fritz Eckert, Hrsg. H. Schambeck, Berlin 1976, S.274.

提供しなければならない、と繰り返し主張している。⁸⁾ こうしたマイアーの妥協のない、過激な姿勢に対して、友人・知人だけでなく、他の人たちも懸念を抱き、彼に対して忠告や警告がなされたが、彼は決してそれには耳を貸さず、反ナチスの姿勢を貫き通した。1940年以降、教会上層部の聖職者から、それどころかイニツァー枢機卿からも直々に、純粋に司祭として行動するように、とりわけ政治的に人目に立つことのないように、との警告を受けている。勝利に酔ったナチスをこれ以上不必要に刺激してはならず、そのために罪のない者たちが破滅に追い込まれてはならない、という判断からである。

しかしマイアーは活動を止めなかった。彼は他の抵抗運動グループと接触し、彼らと協力して新たな抵抗運動グループ結成のための活動を行なっていく。マイアーの妹の証言によれば、彼がナチスに対する抵抗運動を行なう最終決断を下したのは、イニツァー枢機卿がヒトラーの政策をナチスの「ハイル・ヒトラー」の挨拶で賛同の意を表したからだという。⁹⁾

1940年5月から6月に、マイアーはドイツの抵抗運動グループやカイザーなどのカトリックの労働組合指導者らとコンタクトを取った。¹⁰⁾ カイザーは間もなくウィーンにマイアーを訪ね、またマイアーも1941年夏、1942年10月に協議のためベルリンへ赴いている。¹¹⁾

夫と共にマイアーたちのグループに加わっていたが、幸いに逮捕を免れた人物がグループ結成の経緯とその活動内容を述べている。

「私は夫のレガルディと共に助任司祭マイアーと(。。。)、新たな抵抗運動活動のために手を組んだ。私も既に協力者のグループを結成していた。レガルディは以前はショルツ・グループのメンバーだったが、グループは壊滅してしまった。我々は活動のために共通の計画を練り、とりわけ不可避の場合でなければ他のグループのメンバーの氏名は明かさないことを取り決めた。

個々の下部グループはサボタージュを行なったり、兵役に就くのは不可能だと装ったり、ビラをまいたり、逮捕の危険の迫っている人たちに国境を超えさせたり、必要な資金を調達したり、といったようなことを行なった。

我々3名が自らに課している最も重要な課題は以下の点にあった。すなわち、最終的戦闘と破壊を避けるために、連合軍と連携、協力してその進駐に備えることである。(。。。)

マイアーには連合軍の公使館と繋がりを持つ友人がスイスにいた。夫と私は情報をスイスへもたらした。我々はマイアーの連絡員から、取り決め通りに、我々の情報は同じ方法で西側と

8) Ebd., S.4.

9) Gerhard Jagschitz, a.a.O., S.6.

10) Jan Mikrut, a.a.O., S.164.

11) Ursula Rumpler, a.a.O., S.887.

東側双方に転送される、との確約を得た。(。。。)我々3名はそれぞれ方向性は異なっていたが、共通の行動をとることでは意見は一致していた。」¹²⁾

1942年、マイアーたちはついに「マイアー・メスナー」グループと呼ばれる抵抗運動グループを結成した。マイアーが最も信頼した同志のメスナーはゴム・タイヤ工場総支配人で、彼はマイアーの教会からさほど離れてない所に住んでいた。1896年生まれ、メスナーは第一次大戦後にブラジルで暮し、ブラジル国籍を取得した。1931年、彼はブラジル領事、およびブラジル商工省の商務官としてウィーンに戻ってきた。1934年にはメスナーは産業顧問官として幾つかのオーストリアの企業の近代化に貢献している。その企業の一つがゼンペリート・ゴム・タイヤ製造株式会社で、メスナーはその会社の総支配人に収まったのだった。第二次大戦勃発直前にメスナーは再度ブラジルへ赴いた。公には生ゴムを調達するためだったが、実際は差し迫った戦争から逃れるためだった。しかし彼は会社と社員のことが心配となり、ウィーンへ戻ろうとし、途中のフランスで逮捕される。しかしながら1940年にドイツ軍がフランスに進駐し、彼は解放された。当初よりナチスに敵対していたメスナーは会社内に抵抗運動グループを結成した。彼はメンバーを国内の会社の従業員や、国外の支店の従業員、さらには彼の知人たちから募った。当時キリスト社会党の大臣だった彼の義理の兄もメンバーとなった。

メスナーは結婚していたが、当時有名なピアニストのイサキデスという若い女友達がいた。彼女はウィーンのギリシャ人団体の代表者の娘で、マイアーの教区のゲルストホーフに住んでいた。

「マイアー・メスナー」グループはナチスのテロ政権を崩壊させ、ヨーロッパの同権の諸民族の下にオーストリアの再建を目指す、という目標を掲げていた。またこの目標達成のためには連合国と接触し、協力することが是非とも必要である、との共通認識の上に立っていた。マイアーはこうした目標を達成するために幅広い分野の人間と接触した。その中にはウィーン市の軍司令官シュトゥンプフル、社会民主党の前ウィーン市長ザイツ、オーストリア共産党の幹部たちなども含まれていた。またメスナーの人脈にはウィーンのジーメンスの社長クラウスなどを始めとして、とりわけ産業界、経済・金融界を代表する人物たちがいた。さらにはドルフス、シュシュニク両政府の大臣を務めたキリスト社会党の大物ペルンターもいた。

連合国との最初の接触はスイスで成し遂げられた。1942年夏、ウィーンの共産党の女性党員ゾカールがスイスのルツェルン在住のオーストリア人の神学教授カラーを通じて、彼女やマイアーなどが作成したメモをイギリス、アメリカ、ソヴィエト政府に送ることが出来たのだった。そのメモには「1942年5月1日」を合言葉に各国のラジオを通じてグループの存在をアピー

12) Franz Loidl, a.a.O., S.280.

ルしてくれるように、との願いが書かれていた。そして実際にイギリスのBBCがそれを放送したと言われている。¹³⁾

アメリカの秘密情報機関OSSとの接触はメスナーの女友達イサキデスによって成功している。メスナーと共に反ナチスの態度を明確にしていた彼女がスイスのチューリッヒでピアノ・コンサートを開いた折に、既にOSSの情報提供者となっていた亡命オーストリア人の弁護士グリムが彼女に接触した。そして1943年12月末にイサキデスがメスナーを伴って再びスイスへ赴き、グリムおよび彼の友人で同じくOSSの情報提供者のヨーハムと会い、彼らにドイツのロケット生産や合成ゴムの生産状況についての情報を伝えている。¹⁴⁾ その情報を基に連合軍は1943年8月にウィーン南部の都市ウィナー・ノイシュタットにあった戦闘機製作工場を爆撃している。また1944年初めにはメスナーはイスタンブールへ赴き、アメリカの諜報部員とも会っている。そしてその諜報部員から、アメリカが「マイアー・メスナー」グループの活動援助資金として差し当たり10万ライヒスマルクをブダペストの銀行に振り込む旨、知らされる。しかしながら結果的には3月に資金を下ろしにブダペストに赴いたメスナーは当地で逮捕されることになる。¹⁵⁾

「マイアー・メスナー」グループは他の抵抗運動グループとは活動方法も異なっており、メンバーも少数に限定されていた。メンバーの大半はインテリで、それぞれの能力に応じた特殊な使命が与えられていたと言う。¹⁶⁾ 主なメンバーは上に引用したレガルディ夫妻（因みに夫は化学者だった）で、彼らはとりわけ共産主義の国際的抵抗運動グループとの繋がりを有していた。さらにはウィーンの営林署に勤めていたカルドナツィで、彼はすでに約200名からなる君主制主義的な抵抗運動グループを率いていたが、その内の少数のメンバーが「マイアー・メスナー」グループに加わった。さらに法律家の上等兵リッチュ、司法試補で下士官のパウジンガー、社会主義グループとの繋がりを有していた学生のクレッペル、さらには軍の衛生兵だった医師のヴェナールがいた。¹⁷⁾

安全上の理由から個々のグループは個別に活動し、ほんの僅かのメンバーしかお互いに顔も知らなかった。マイアーは2、3度営林署の事務所でカルドナツィのグループの会合に参加したが、その会合ではとりわけビラの作成が問題となった。そのビラを使って国民に戦争の真の状況を知らせようというものだった。

13) Siegfried Beer: "ARCEL-CASSIA-REDBIRD": die Widerstandsgruppe Maier-Messner und der amerikanische Kriegsgeheimdienst OSS in Bern, Istanbul und Algier 1943/44 / Wien 1993 Erschienen in: "DÖW-Jahrbuch 1993", S.78.

14) Ebd., S.79.

15) Jan Mikrut, a.a.O., S.166.

16) Ursula Rumpler, a.a.O., S.887.

17) HelgaThoma, a.a.O., 148.

スターリングラードの敗北以降、ヒトラー・ドイツの終焉が近づいていた。そうした状況を人々に認識させるために、リッチュとパウジンガーは 1943 年 9 月に 3 枚の異なったビラを作成し、それをウィーン市内でばら撒いた。ビラの 1 枚にはこう書かれていた。

「東部戦線ではこの二ヶ月間でヒトラーは 150 万の兵士を犠牲にした(。。) オーストリア人よ、ドイツ人よ、君たちが態度を鮮明にする時がきた！ 個々人の政治的立場など斟酌せず、整理するのだ。ナチの連中を追っ払い、われわれの国に待ち焦がれた自由を与えよう！」¹⁸⁾

また別のビラにはこう書かれていた。

「何のためにまだ戦争を続けるのか？ 全ての戦線で部隊は後退している。まだ勝利を口にしてるのはヒトラーのような狂人ないしは犯罪者でしかない。避けがたい終焉が近づいている。何のために更に数千名もの犠牲者が必要なのか(。。)。我々自身をこうした暴政から解放する時がきたのだ(。。) 共通の目標へ向って手を組もう。歴史上最大の、呪われた犯罪者ヒトラーを破滅させるために。」¹⁹⁾

またカルドナッツィたちは、希望する兵士たちに熱がでる菓を配布し、前線へ送られないようにした。またフランス人の戦争捕虜や希望するドイツ軍兵士を国外へ逃亡させた。

III 逮 捕

しかしながら彼らのグループは秘密国家警察によってかなり前から察知され、監視されていた。警察は助任司祭であるマイアーが中心人物であることも知っており、逮捕するための適当な機会を窺っていたのである。またグループの中に潜り込んでいたスパイが、グループの活動の詳細を警察に知らせていた。²⁰⁾

1944 年 1 月、カルドナッツィが逮捕された。同年 3 月にはアメリカからの援助資金を引き下ろすためにブダペストに来ていたメスナーが逮捕された。そして同月 28 日、マイアーも逮捕された。マイアーが助任司祭を務めていたウィーン 18 区ヴェーリンクのゲルストホーフ・聖レオポルト教区の記念帳に以下のような書き込みが見られる。

「1944 年 3 月 22 日 (キリスト受難の金曜日) に教区は、晴れやかな空に走る稲妻のように以下

18) Ebd., S.149.

19) Ebd., 148.

20) Jan Mikrut, a.a.O., S.166.

の事実直面した。今日の早朝のミサの後で、我らの助任司祭ハインリッヒ・マイアーは聖具室で3名の秘密国家警察によって逮捕され、車で連行された。(。。。)数日後、司教座協会参事会会長ヴァーグナーは、事態はマイアーにとって非常に良くない、と伝えている。」²¹⁾

またある別の人物はマイアー逮捕の状況をこう伝えている。

「私たちが、マイアーはもう安全な場所にいる、と思っていた1944年3月28日に、彼は教会で逮捕され、連行されてしまった。当時教会の家政婦だったイディンガーが逮捕の状況の証人だった。マイアー逮捕に驚いた彼女はすぐにマイアーの部屋に走って行き、重要な書類を全て持って、向かいに住んでいるフィルネス神父の部屋へ駆け込んでいった。秘密国家警察はフィルネス神父の部屋までは立ち入らなかったからである。何故なら当の神父は従軍中だったからである。かくして逮捕されたばかりのマイアーの部屋からは証拠物件は何一つ発見されなかった。」²²⁾

マイアー逮捕の後、続けざまにヴェナール、クレッペル、レガルディ、ホーファー、リッチュ、パウジンガー、イサキデスなど主要なメンバーのほぼ全員が逮捕された。これ以降、長い尋問と拷問が続くことになった。9月16日にマイアーはウィーン州裁判所に移送され、10月に裁判が開始されるまで、囚人房内で英語とフランス語の学習に取り組んだと伝えられている。²³⁾7カ月に渡る未決拘留後の10月27日、28日の両日にマイアーと9名のグループ・メンバーに対する裁判が開始された。

マイアーは全ての罪を自分一人で引き受けようとした。そこで一人の裁判官が彼に「他人の罪まで引き受けて、あなたは何を得るといえるのですか」と質問した。それに対してマイアーは「裁判官、私にはもう何も必要とするものなどないのです」と淡々と答えたと言う。²⁴⁾

マイアーたちは大逆罪および国家機密漏洩罪、さらには反体制ビラの配布、出所不明の大金の所持、および連合軍への情報漏洩などの罪に問われることになった。しかしながら証拠不十分のため、審理は一旦は延期されることになった。ところがベルリンから審理を続行し、即刻判決を出すようにとのとの指示がなされ、²⁵⁾かくして審理は続行され、判決が言い渡された。

21) Ebd, S.166. マイアー逮捕の日を3月22日としているが、実際は28日であり、記憶違いと思われる。

22) Norbert Rodt/Anton Hecht, a.a.O., S.56.

23) Ursula Rumpler, a.a.O., S.888f.

24) Helga Thoma, a.a.O., S.157.

25) Ursula Rumpler, a.a.O., S.888.

IV 民族裁判所の死刑判決

マイアーたちに下された民族裁判所の判決は以下の内容である。

- 「I 被告人たちはアルプス・ドナウ大管区に於いて、主としてウィーンで、時には国外で 1942 年から 1944 年にかけて分離主義的な連合に加わることで国家転覆を準備し、そのことによって我が帝国の敵国を幫助することになった。即ちリッチュとパウジンガーは国家に敵対するピラを作成し、マイアーとメスナーは敵国と連絡を取り、敵国に空襲させるためにドイツの軍需工場の場所を教えた。被告人ヴュナールは国防軍兵士や保安警察官たちに、彼らが少なくともしばらくは兵役には不適格とするために、様々な手段や策略を用いた。ホーファーはこうした目的のために自分に 2 本の注射を打ち、さらにカルドナッツィと共に軍の診察を前にしていた兵士たちに発熱作用のある薬物を与えた。ヴュナール、クレッペル、ホーファー、およびリッチュはフランス兵捕虜たち、ないしはあるドイツ人兵士を国外へ脱出させる手助けをしようとした。レガルディは被告人マイアーが国家反逆的策動を行なう手助けを行なった。
- II フルテラーが被告人リッチュの大逆罪の目的を知らずながらタイプライターを使用させたことは、完全には証明されなかった。それ故、彼は無罪とする。²⁶⁾
- III 以下の被告人たちを有罪とする。
被告人マイアー、ホーファー、カルドナッツィ、ヴュナール、クレッペル、リッチュ、メスナーおよびパウジンガーを死刑に処し、かつ終身名誉剥奪とする。被告人レガルディは懲役 10 年および 10 年の名誉剥奪に処する。
- IV 被告人レガルディに保護検束の 10 ヶ月間を刑期に算入することとする。
- V 被告人メスナーの財産は没収される。さらに犯行に使用された、ないしは使用する予定だった注射器の類および複写機は没収する。
- VI フルテラーを除く被告人全員は裁判の費用を負担するものとする。無罪を言い渡された被告人フルテラーに対する裁判によって特別に生じた費用も負担するものとする。」²⁷⁾

マイアーは審理の間、自分のことは全く気に掛けず、同じ被告人たち、とりわけメスナーが無罪となるよう努め、それに応じた証言を行なったと言われている。²⁸⁾

26) Jan Mikrut, Helga Thoma および Norbert Rodt/Anton Hecht は被告人の名前を「フルテラー」と記しているが、Franz Loidl だけは「フィッツトゥーム」としている。筆者は前者に従い「フルテラー」としておく。

27) Franz Loidl, a.a.O., S.276ff.

28) Ebd., S.281.

有罪判決の後、マイアーはメスナーと他の10名の囚人たちと共にマウトハウゼン強制収容所へ送られた。秘密国家警察はそこでの拷問によって新たな情報を聞き出そうとしたのだった。強制収容所へ送られる車にたまたまマイアーと同乗することになったある囚人がその時の状況、さらにはマウトハウゼン強制収容所に到着した際のことを報告している。

「それは陰鬱で、雨模様の寒い秋の日だった。(。。。)我々の誰一人としてこれからどこへ行くのか、何が起こるのか分からなかった。(。。。)そこには非常にみすぼらしい、防水シートで覆われただけで、腰かけが2,3個付いているエンジン付きの荷車が停まっていた。荷車には我々と同じ格好の数名がすでに乗っていた。後になってその6名の中に(。。。)助任司祭マイアーがいたことが分かった。(。。。)特にマイアーは凍えていた。彼はコートもなく囚人服を着て隅の方で静かに座っていた。しばらくして誰かが彼にコートを着せかけてやったが、明らかに彼に対して敬意を抱いていた秘密国家警察の刑事たちはそれを黙認した。(。。。)」

その時初めて実に低い声で〈マウトハウゼン〉という言葉が聞こえた。我々はそれが死の強制収容所であること、ドイツの強制収容所の中でも極めて悪評高い収容所の一つであることを知っていた。(。。。)

〈収容所長による囚人点呼が行なわれた。〉ほとんどもう亡霊のように見えるマイアーの番になったとき、彼は大声ではっきりと〈マイアー、カトリックの司祭、既に死刑判決を受けています〉と言った。我々全員は背筋がぞくぞくした。この二人の死刑囚〈マイアーとメスナー〉が我々と一緒にこの恐ろしい収容所に起こりこまれたということは一体何を意味するのだろうか、と我々は自問した。この人物たちをさらに苦しめたいのだろうか？我々と繋がりがあるとも思っているのだろうか？それともそれ以外に何かあるのだろうか？収容所長はすぐに我々にはっきりと理解させた。ここでは我々は決して安らぎを得ることはない、ということ。」²⁹⁾

収容所でのマイアーの日常の詳細は不明であるが、彼は様々な拷問によって自白を強制されたが、最後まで無言で拷問に耐えたという。

マイアーと同じ荷車に乗っていた先の囚人はマウトハウゼン収容所での戦慄すべき生活を描写しているが、偶然にもマイアーの隣の独房に入れられ、壁を叩いてお互いの安否を伝えあったという。

「後に入った囚人房20号室でしばらく私はマイアーと隣合わせになった。彼と私は定期的に

29) Ebd., S.282ff.

壁を叩いて挨拶を交わした。彼はいつも叩いて返事を寄こしたので、我々は彼がまだ生きていることを喜んだ。時折彼の姿をちらりと目にしたが、我々には彼は亡霊のようにしか見えなかった。(。。。)

ある日マイアーの部屋からもはや壁を叩いての返事が来なくなった。我々は最悪の事態を懸念した。用心深く我々は再度壁を叩いてみた。しかし返事はまたなかった。我々は諦めた。彼の身に何が起こったのだろうか？もしかすると彼はもう生きてはいないのだろうか？数週間後によく、私は彼が再びウィーンの州裁判所へ連れ戻されたことを耳にした。彼は死の独房から私に挨拶を寄こしてくれた。マウトハウゼンで彼は我々をしばしば祝福してくれた。当時彼は既にもう人間ではなく、肉体というよりはむしろ靈魂だったので、彼の司祭としての祝福は特別な効果があったようだった。³⁰⁾

V 断頭台への道

マイアー逮捕以降、彼の助命のためにイニツァー枢機卿を始め、何人かの人々が奔走していた。イニツァー枢機卿はベルリンのローマ教皇大使とも連絡を取り、当局との調停を依頼した。またウィーン大学のローマ法、市民法の著名な教授もベルリンへ恩赦の請願を行なった。マイアーの年老いた母親も息子のために恩赦を願っていた。しかしながら彼の命を救うというあらゆる試みは無駄に終わった。

1945年1月18日にマイアーとメスナーはマウトハウゼンからウィーンへ連れ戻され、2月半ばまでゲシュタポの「特別監視」を受けた。その後二人はそれぞれ州刑務所へ移され、そこで処刑を待つことになった。

その頃のウィーンの街は連合軍の爆撃に晒され、ロシア軍が徐々にウィーンに近づいていた。そのため囚人たちの間には絶えざる死の不安にも関わらず、かすかな希望の念も芽生えてきた。

刑務所では水曜日と木曜日に処刑が行なわれていたために、囚人たちはその日に自分の独房のドアが開けられるのを恐れていた。1945年3月22日の木曜日、マイアーの独房のドアが開けられ、彼の名前が読み上げられた。彼は木製のスリッパを脱がされ、連行されて行き、両手、両足を縛られたまま検事の前に立たされた。検事は判決を読み上げ、こう付け加えた。「判決は確定し、本日18時にこの建物内で執行される。」³¹⁾

マイアーと共にこの日さらに二人の仲間も処刑された。まだ26歳という若いクレッペル、それに42歳のヴェュナルの二人である。

福音教会の牧師リーガーは刑務所付きの牧師だった。リーガーにはこの数週間の間に個人的に非常に親しくなったマイアー、クレッペル、ヴェュナルの3名の最後を看取る、という過

30) Ebd., S.284f.

31) Helga Thoma, a.a.O., S.162.

酷な課題が課された。3名の内、まずはヴェナールがギロチン台へ向い、次にクレッペル、そして最後にマイアーが向かった。

リーガーはマイアーと並んで処刑室へ入って行く際に、聖書のロマ書の第8章35節から39節を読み上げたという。リーガーはその折のことをこう記している。

「私が1945年3月22日にゲルストホーフの助任司祭マイアーの処刑に同行したとき、私は彼のためにロマ書の第8章35節から39節を読みあげた。我々は一步一步悪評高い鉄の扉に近づいた。その扉の背後には断頭台が血に染まる仕事を待ち受けていた。黙ったまま助任司祭は聖書の言葉に耳を傾けていた。そして私が〈我らをキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か〉の箇所差し掛かると、彼はこの詩句の最後の言葉〈剣か〉の詩句を思案するように繰り返して、私の話を遮った。声を震わせずに後に続く詩句〈録して、《汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られた》とあるがごとし〉を読み続けることは私には容易ではなかった。」³²⁾

死を前にしてのマイアーの落ち着いた整然とした態度、強い信仰の念、それには同じウィーン州裁判所で死刑判決を受けていたフランシスコ修道会のシュタインヴェンダー神父との出会いが影響している、と言われている。処刑までの最後の数日間、マイアーは神父との対話により、内面的に大きく成長し、取り乱すことなく、整然と断頭台に向かっていったのである。³³⁾ マイアーは死の数日前に担当の弁護士に「私は喜んで死んで行く。というのも今以上に死の準備が十分できていることはないからである。自分の為したことを私は後悔などしてはいない。何故なら私はオーストリアのために為したのだから。」³⁴⁾ 因みにシュタインヴェンダー神父はマイアーの処刑から3週間後に銃殺されている。³⁵⁾

州裁判所の死亡登録簿によればマイアーは3月22日18時40分に断頭台で処刑され死亡した。38歳だった。彼らの処刑がウィーン解放前の最後の処刑となった。因みにメスナーは4月の初めに再びマウトハウゼンに連れ戻され、そこで3週間後にガス室に送り込まれ、命を落としている。

マイアーは断頭台でこう叫んだと伝えられている。〈キリストよ、主よ万歳！オーストリア万歳！〉³⁶⁾ 同じく囚人でありながら第二次大戦後まで生き延び、オーストリアの文部大臣、国会議長を務めたフルデスはマイアーのこの言葉に関して以下のように述べている。

32) Franz Loidl, a.a.O., S.286f.

33) Ebd., S.287.

34) Ursula Rumpler, a.a.O., S.889.

35) Franz Loidl, a.a.O., S.287.

36) Ebd., S.285.

「逮捕されている間に、もはや私を生かしてはおかない、という当局の態度がかなり明白になったとき、私は神に対する信条告白をどんな言葉で終えるべきかを色々と考えた。言葉が多過ぎるのは許されなかった。断頭台へ導かれていく者は、もはや語るための時間は多くはないからである。かくして私は創造主の息子となって主に感謝の言葉を述べようと決めた。〈キリストよ、主よ万歳！オーストリア万歳！〉という言葉は私には神と我々の祖国に対する最も簡潔な言葉だと思われた。私は 1945 年 3 月 22 日に生命を落とさざるを得なかった一人の若い司祭が、死の独房から引き離されて断頭台へ連行される際に、そう大きな声で叫んで、囚人棟の中にいる多くの囚人たちと別れを告げたことを聞いたとき、深く心を動かされた。」³⁷⁾

マイアーおよび同時に処刑されたヴェナール、クレッペルの 3 名の遺骸は共にウィーン中央墓地の囚人墓地に埋葬された。しかし直後に彼と親しかった二人の医師が埋葬場所を探し出し、遺体を掘り起こし、3 名はウィーン 14 区のノイシュティフトの名誉墓地に最終的に埋葬された。墓碑銘には「彼らはオーストリアのために倒れた」と刻まれている。³⁸⁾

お わ り に

序で述べたようにウィーン 18 区ヴェーリンク地区に 1949 年「ハインリッヒ・マイアー博士通り」が設けられた。1988 年 4 月には、マイアーが 1935 年 9 月 1 日から逮捕される 1944 年 3 月 28 日まで助任司祭として務めた同じくウィーン 18 区のゲルストホーフ・聖レオポルト教会のファサードに記念銘板が掲げられた。銘板には大きくマイアーの氏名、そして生年月日、1944 年 3 月 28 日に逮捕されて祭壇から連行されたこと、そしてその下に「1945 年 3 月 22 日、キリストとオーストリアのために断頭される」と記され、さらにその下にはギロチンで胴体から分断された頭部を受け入れた籠が輝く太陽になっているようなオブジェが添えられている。

1990 年 6 月、芸術家のシュヴァーベニッキーによって高さ 2 メートルのマイアーの木像が製作され、ゲルストホーフ・聖レオポルト教会の側廊に置かれた。その木像は斬首された司祭を表しており、首から上の頭部は存在しない。また司祭の左手の肘から下は司祭の服ではなく、囚人服を思わせる縞模様になっている。さらに 1994 年 3 月にはこの木造の台座が新たに作られ、その台座を囲む縁石はマイアーが一時収容されたマウトハウゼン強制収容所の採石場で取られたものが使用された。

マイアー没後 50 周年にあたる 1995 年 3 月 22 日にゲルストホーフ・聖レオポルト教会でミサと記念行事が行われた。ウィーンの大司教ヘルマンは同年に出版されたマイアーを讃える『復

37) Norbert Rodt/Anton Hecht, a.a.O., S.80.

38) Franz Loidl, a.a.O., S.287.

活の証言』の後書きにこう書いている。

「司祭マイアーは祖国のため、教会のために文字通り〈自分の頭を差し出した〉のだった。彼は自分の良心に基づき、そうせざるを得なかった。良心は彼にとってドイツ帝国の民族裁判所以上に重要な最初で最後の審判の場だった。」³⁹⁾

39) Norbert Rodt/Anton Hecht, a.a.O., S.96.

